

新出資料 「土御門院女房」(冷泉家時雨亭文庫蔵)の翻刻

山崎 桂子

冷泉家時雨亭叢書第二十九卷『中世私家集五』に影印で収められている新出資料「土御門院女房」(仮題)の翻刻である。土御門院に仕えたある女房が、院没後に院のことを懐古して記した日記風の作品で、和歌四十三首(長歌一首)を含む。作者は家隆女である小宰相の可能性もあるが、今のところ不明である。作者の確定のみならず、土御門院周辺の文学環境を解明する上でも貴重な資料である。

(キーワード) 土御門院、土御門院女房、承明門院小宰相、土御門院小宰相、家隆女

はじめに

本稿は冷泉家時雨亭叢書第二十九卷『中世私家集五』(平成一三年四月、朝日新聞社)に影印で収められている新出資料「土御門院女房」(仮題)の翻刻である。書誌は井上宗雄氏執筆の同書解題に詳しく、それに拠ると、書写は鎌倉中期、書名がなく、作者も不明である。江戸中期頃補われた紙表紙に「家隆女小宰相が書いたものか」という意のことが書かれている。内容は、第八十三代天皇であった土御門院に仕えたある女房が、院没後に院のことを懐古して記したもので、和歌四十三首(長歌一首)を含む。井上氏も指摘されるように、和歌が文章よりも一、二字分下げて書かれて

おり、家集というよりは日記風の作品である。本書は作者の確定のみならず、土御門院周辺の文学環境を説明する上でも貴重な資料である。

本書は全体にわたって虫損が見られるが、特に前半部は天地に欠損があるので、その状況を忠実に再現するために、ほぼ原本通りの体裁で翻刻した。校訂本文をも併せて提示したかったが、紙幅の都合で叶わなかった。他日に期したい。その他、概ね次の要領で翻刻にあたった。

一、漢字、あて字、仮名遣い、暈字等、すべて底本のままとしたが、漢字の字体は通行漢字体に改めた。

二、虫損箇所は□で示している。その際、おおむね虫損部に書かれていたと思われる字数分を□で示しているが、あくまで推定の字数である。

三、一部虫損にかかっているものの、ほぼ判読できる字については「」で示している。

四、不読の文字が二箇所ある。※で示している。

五、補入と重ね書きが各一箇所あり、それぞれ傍点を付して注記した。

六、一面の本文の終わる箇所に「」を付し、その丁数を記した。

七、和歌には①～④③の歌番号を付した。

その他、脱字や誤写かと思われる箇所もあるが、影印が公刊されている上、解釈にも関わってくるので、ここではそのままにしている。誤読箇所もあろうかと恐れる。特に二つの不読箇所と併せて大方の御教示を仰ぎたい。

尚、冷泉家時雨亭叢書の解題執筆者である井上宗雄氏の御好意を忝くし、翻刻にあたっては伊牟田經久先生の御教示を得た。ここに記して御礼申し上げたい。

「土御門院女房」翻刻

此集は土御門院につかへ

まいらせし女房のかける

物とみゆもし家隆卿

の女小宰相などにてや

あるらん

四にて位につか

〔お〕はしまして十二

その、ち十年

もいて る時なく

〔かた〕しけなくたのみ

きまいらせしに

る〔か〕に御わたり

ささきのよの御※

をやわかち給はらせお

〔し〕ましけむも

へときこえさせ

┌ (後補前表紙)

これもと

て御いてたちあり

らす御ともすへきみ

おもひさためな〔ら〕

まのおそろしさ人

めかみにてのこりと

心地せむかたなし

①みにかへておもは〔ぬ〕

しもなきもの

とまるはをしきいの

なりけり

月御くたりにて

ほりかはの堂

あからさまにわたらせ

します御ともにまいり

れはた、いまはかりそ

しとおもふにしろ

やとのみ覚えて

┌ 3ウ

┌ 1ウ

┌ 4オ

┌ 2オ

② いて、ていなんすかた□

みてもいかにせむ□□

さきたついのちと「も」□

「 5ウ

あか月ちかくなりて心「も」

あらねは

③ いつちとも思もわか□

あけほのにかてな「み」□

のさきにたつらむ

御こしのよるほには□

さふらひあはれたる人□

なくけしきのき□□

れはことほりにかなし□

て

④ ありしにもあらぬ□

ゆきと思にもつら□□

そてはさしもぬるらめ

土御門殿にかへりまいりて

「 6オ

ひるの御やすみ所の御さ

とりのけうちらはらひなと

する心ちなみたにむせひ

ておほゆれは

⑤ かはりゐるかりのよと

このちりはかりおもはさり

きなかゝるへしとは

土さへ御わたりあるに

⑥ 人かすにけふはゆくと

もわひつゝはかへるも

とさとおもはましかは

ちかくわたらせ給へしと

て阿波へ御わたりあるへ

しときくにも

⑦ なにと又なるとの浦の

うらわたりあはれや

なにのむくひなるらん

ひむかしむ(補入)きの御つほに

「 7オ

「 8ウ

「 9オ

くれたけをうへられたる

みいたしてふしたれば

風のふくにあはれもせ

むかたなし

⑧よろつよのともと

そうへしたけのはに

□とりかなしき風わたる

なり

ねられぬまゝにありあけ

の月のくまなきをなか

めてつほねのうへくち

もたてぬほどに土御門

の大納言殿女院の御方にま

いらせ給てあか月ちかくなる

までさふらはせ給ていて

させ給にや御つまとあく

おとして中門のかたへ

あゆみおはしますに

┌ 10ウ

┌ 11オ

御ともの人めさすよ

りるさり給てありあけ

の月をななめさせ給

梁元昔遊春王之月

漸落周穆新会

西母之雲欲婦と

ななめさせ給を

きくに

⑨みなれこしそのおも

かけの恋しさもいかに

まことにありあけの月

心もあらねはみなみお

もての中門のうちを

みれば御こゆみのありし

ところの

かはらぬをみて

⑩もゝさやもむなや
なかりしあつさゆみ

┌ 12ウ

┌ 13オ

┌ 14ウ

なとひく人のなき

よなるらん

⑪ わすられぬおもかけは

かりみにそえてみるも

かなしき月のかけ哉

女院の御所の御なげきこ

とはりにもすきてみま

いらするかなしき

⑫ なみたかはそてよりを

つるたきつせに

うきぬはかりとみるそ

かなしき

たちよるかたもなき

心ちのみしていかにすへ

きそやとそなけかる、

⑬ かすならてほとなき

きみとそおもひし

にいまは心のをきと

「 15オ

「 16ウ

ころなき

しりたる人のもとより

なげきもいかはかりかと、

ひにつかはしたるもも

よをさる、心地して

⑭ かなしさのそのあか

月のま、ならはけふ

まで人にとはれまじやは

京をた、せをはし

ますあか月をおもひ

いつれはいまそかきり

と覚えしになにとなく

あけくれてなからへたる

も我なからつれなく

覚えて

⑮ いまはとておもひをく

りしあけほの、心の

いかてなをのこりけん

「 17オ

「 17ウ

「 18オ

をかしき事もあれは

おのつからうちわらひな

とするもこはなにごと

そやとおとろかれて

⑩ありふれはなくさむ

としもなけれとん

なみたのひまのある

そかなしき

日くらしよますから

なみたのみひまなきに

⑪わかそてをなに、

たとへむあま人も

かつかぬひまはぬれす

とそきく

くまなき月をみれは

おなしみそらそかしと

をもふにもかきくらす

心ちして

「 18
ウ

「 19
オ

⑫おもひやる心やゆき

てもろともたひ

のそらなる月をみるらん

ふしたるところのもる

をそれはみるかと人とへは

⑬このころのとはなみ

たにならはれてあめ

のもるにもかへさゝり

けり

御方々の人のめとも、

おとるもあらしとおもふも

いとかなし

⑭たつねはやたれもな

けきをこりつめて

むねにたく火のほの

をくらへを

人のうせたるなけきを

きくにもいかにしてなから

「 20
ウ

「 21
オ

「 22
ウ

へてすくすそと思に

⑲ あさましくおもふにた

かふいのちかないとふもな

かしおしめともなし

御所にてはあたりになくさ

むかたもなくはたもみまい

らするやうなれはとのゐ

ところにてたれはいと、な

くさむかたもなく

⑳ やとかへておもふも

かなしいかにせんみを

もはなれぬきみかおも

かけ

かすならぬみにてかたしけ

なく御いのりにかなふへし

とはなけれどもみか月をふみ

まいらするにはいまひとた

ひもみまいらせはやと申さ「る、」

「 24ウ

「 23オ

こそ

㉓ 三日のよはかけたにみ「す」□

いのれとんむなしくて

のみありあけの月

こしかたゆくすゑをな

にとなくあんしつ、けて

ぬともなくてあかすひか

すのみつもれは

㉔ まとろめはゆめにも君

をみるものをねられぬ

はかりうきものはな

し

なけくく 正月にもなりぬ

㉕ さりともとまつ事も

なきとしたにもか

らすかへる春にやはあら

ぬ

春にもなりぬれは中門の

「 25オ

「 25ウ

さくらうつくしくさき

たるをみれば

「 26オ

②6 きみまさぬやとにはなに

とさくらはなかへらぬはるは

えたにこもらて

②7 おのかさくはるをもし

らは心してことしは

花のにははさりせは

花こそ物はとうらやま

しくも

「 26ウ

覚ゆみやつかはへもひさ

しくなりぬれは内裏へ

まいれかしといさなふ人の

あるにもまつなみたの

みところせくて

②8 さらに又おほうちやま

の月もみしなみた

のひまのあらはこそ

あらめ

「 27オ

ふるき御所の、きにし

のふといふ草のしけり

たるをみて

②9 のきはにはわする、

草もある物をし

のふはかりはなにし

けるらん

つほねのまへにやまふき

のうつくしくさきたる

か露にしほれてみゆる

あしたに

③0 くちなしに物こそ

いはぬいろなれと露に

もしるしやまふきの花

みな月に物、なけかしさ

けふはかりにてあらはやと

おもふにそれにも心もかは

「 28オ

「 27ウ

らす

③①うき事はみな月はつと

おもひしに秋たつ

日こそ又かなしけ

れ

なけかしさもみとせに

なりぬとしのくれに

③②けふもくれあすもあけ

ぬとかそへきてなけ

く

みとせのはてそかなし

き

つきもせすなみたのひ

るよもなければ

③③かくはかりなげかさ

ましあか月の露

よりさきにきえなま

しかは

「 30 オ

又あきにもなりぬむ

しのごゑくをきくな

かにまつむしのきこ

ゆれば

③④かへりこむきみまつ

むしのごゑきけは

秋よりほかにうれ

しきはなし

かくれはておはしまし

ぬれはゆめにゆめみる

心ちしてつやくとうつ、

の事とも覚えず

③⑤おのつからこきも

ややすと思しをやか

て

むなしきふねそかな

しき

かくれさせおはしまし

「 32 オ

「 31 ウ

てのちあはより人くくの

ほりあはせ給つるすか

たともをみまいらすれば

③⑥ いろくの花のすかたと

みしものを一いろ

なるすみそめのそて

浄土に御まいりとき、まい

らせてのちはつねの御

くちすさみわすれかた

くて

③⑦ 夏の日のはちすを

おもふころこそ

いまはず、しきうて

な、るらめ

秋の夜月をまつと

いふしをななめさせ

おはします御こゑお(重ね書き)いま

もき、まいらする心ち

「 33ウ

「 34オ

して

③⑧ あまつそら思いて、や

なかわらむあきのよ

まちし山のはの月

みやこをた、せおはし

まし、日はけふそかしと

おもふかなしくて

③⑨ かそふれはうかりし

けふにめぐりきて

さらになしきくれの

そら哉

十月十一日にかくれさせおはし

ますつこもりにくれゆ

くそらをみれはうらめし

くて

④⑩ 十かあまりひとひすく

るもかなしきにたつ

さへをしき神な月かな

「 35ウ

「 36オ

「 37ウ

御はての日ちやうもんして
いつれは

④①かへるさはいと、物こそ

かなしけれなげきの

はてはなをなかりけり

なをうつゝの事とも

覚えてなをはるかに御

わたりあると覚えて

④②わすれてはおなし

よにある心ちして

さはさそかしと思

かなしさ

はるのはしめよりとし

のくれまでこしかたゆく

さきやすむ時なく

覚えて

④③はつはるの 十日あまりに

くらゐる山 うつしうへて

「 39ウ

「 38オ

し まつかねの いつしかこ
たかく なりしより あま
つそらふく 風なれと えた

もならさすをとなくて

たのみあふかぬ人もなし

四海のなみもしつかにて

ゆきかふ、ねもおそれな

くたみのかまともゆた

かなり春は宮人うち※

れてのとけき、みのみよ

なれはおほうちやまの花を

みる夏は衣をたちかへて

山郭公まちえつ、おな

し心にかたらへはみし

かきよをそうらみこし

秋はよすからなくむしも

のとかなるへき君かよを

こゑふりたて、きこゆなり

「 40オ

「 41ウ

「 42オ

冬はあしまのほとりも

たまものところにはねか

はしおとろくけしき

もさらになき花も

もみちも月ゆきも

をりをすくさすなかめ

つ、十返三の春秋は

こ、のへにてそすきこ

しをみもすそかはのな

かれにはかきりありけるふ

ちせにてついいはをりぬ

給にきしつかなりける

うれしさときみをあふ

きてすくすまによのを「、」

あみにひかれつ、とさへあは

へとめくりきてあとにとま

れるあま人はなみたを

なかしてすくすかなはるか

「 43
オ

「 42
ウ

なりともわひつ、はよにたに

おはしませかしと思しこと

もかひなくてついにむな

しきふねなれはいかに

せましとなけくとも月日

のみこそかさなりてたと

へむかたもなかりけれ

返々もなにせんに春

をうれしとおもひけん

はてはかなしき神な月哉

「 44
オ

「 43
ウ